

グノーシス対プラトン 『テイマイオス』

〔1〕コメント

(1) 啓示の物語であるグノーシス文書を読んで理解することが、自分が啓示に照らされる現実になる、という⁽¹⁾。この点は大貫隆(敬称略)とヨナスは一致する。どんな文書であれ、文字を読んで啓示に照らされることになる⁽²⁾とはどのようなことだろうか。神と特別な関係に結ばれている特権ある通路が啓けるのだろうか。それともグノーシスの超越的無世界主義が、「世界・内・存在」の徳の実行と理性の活動という、長く困難な道に従う必要をいささかも感じなかった⁽²⁾ことの裏面だろうか。あるいは悲劇を見て、感

情移入で自分が主人公と融合し、主人公の運命を現実の我がこととして受け止めるのと似ているのだろうか。劇が終わって劇場の外に出ると、現実の冷たい風に首をすくめるのだが。

グノーシス文書に触れることが啓示になるほど、人間の言葉が強い言語でありうるだろうか。言葉は対象となる実在そのものではない。実在を何らかの仕方ですす像、記号である。「犬」という言葉は犬ではない。言葉と存在の関係は、言即事となるような創造的直接的性はなく、「一」が「他」を表現するように規約によって定められた記号関係である。両者の間には隙間がある。そこに、言葉が何を指

山本 巍

し示しているか、不透明になることも、有りもしないことを表現する可能性もある。

「一他」関係は「一」と「多」関係でもある。犬といっても多数個体がいる。ある人が「犬」という言葉を使ったとき、どの犬を指示しているかは、すぐには分からない。多数のものを十把一絡げにする言葉の暴力がいつもついて回るのである。赤いバラを見ても、各自が見ている赤がどんな赤かは他人には分からない。信号の赤ならば、赤信号では誰もが止まるという日常行動の一致が、同じ赤を見ていると信じることを支えているだけである。

「正しい」という言葉の場合はさらに深刻になろう。「正しい」を使う人が、それで何を指しているのか。それぞれみんな違う意味内容をこころに抱いて、しかしそのことに気づかないことが日常の現実である。テロという行動に直面して、「何が正義か」の意見の裂け目が深刻な事態を人びとの間に引き起こすことになる。「老バルメニデス」が「若いソクラテス」に、「わたしと君とが共通にもっているのは、ただ名前だけであり、われわれがその名前前で呼んでいる当のことにについては、おそらくわれわれは、各自が自分だけの勝手な仕方で了解しているのかも知れない。けれ

どもおよそ常に何ごとにつけても、それを規定するロゴスを離れて、ただ名前だけ合意して終わるべきではなく、むしろロゴスを通して当のことに同意が一致するようにしなければならぬ」(『ソフィスト』218c)と警告している。

単純に見ても以上の「一他」「一多」関係がわれわれの言葉を取り巻いている。それだけわれわれの言語は不透明で隙間だらけの弱い言語でしかない。しかし言葉の混乱は考えの混乱である。

人間の言語に対するギリシアの反応の典型を挙げれば、ソクラテスが問答という破壊実験をかけた。われわれが日常当たり前に使っている言葉の一つ一つを、市民との間で吟味検討し批判的問答を遂行したのである。それは重箱の隅をつつくようなあまりに煩瑣にも見え、「小理屈 (sunkologia)」とも揶揄されたのである。しかし「不正確な言葉を使うことは、それ自身で好ましくないだけでなく、こころに一種の災いの種を蒔くことになる」(『パイドン』115e)と譲らなかった。明瞭に表現することが要求され、議論の地平で新しく語り直すことが絶えず求められたのである。語り直す必要がないほど確固とした言葉はな

かったし、吟味なしで引用されるほど権威のある言葉もなかった。「ソクラテス以上に知恵のあるものはいない」という神託でさえ、論駁の吟味抜きでは受け入れることがなかった（『ソクラテスの弁明』31b-32e）。しかしソクラテスは何よりも神を信頼していたのである。プラトンが宇宙創出記を書いた『ティマイオス』がどのような言葉の戦略をとったか、は後に触れる。

一点付け加えると、ギリシア人が明瞭な表現を作ること
に拘ったのは、くつきりした輪郭の形において立ち現れる
ことを存在と理解したと結びついている。そして魔術
や呪術、宗教儀式で対処する他なかった世界の漠然とした
闇の恐怖からスタートしたが、神々を明瞭な形の人格とし
て具体的に表現した詩人たちのお陰で、世界の非魔術化が
起き、ギリシア人が明るい世界に生きることになったので
ある³。

ユダヤの旧約の世界を一瞥すれば、神の指で石版に刻ま
れた十戒は、人が自分のところに刻み込まなければならな
い。普遍的大原則が自分の生き方の根まで届くように、そ
して日々の生活の具体的文脈に結びつくように、繰り返し
語り直す必要があった。そのために絶えざる祈りと学習と

教師・ラビを必要とした。またヘブライ語は子音だけで書
かれていたから、母音の欠落という空をどのように読み解
くか、空を吹き抜ける pneuma が必要、という事情もあつ
た⁴。従って旧約の世界は一義性に縛られない言語とテキス
ト、思考と学習、伝承と靈風という巨大な集積の渦だった
のである。

ギリシア・ユダヤ両方にとってそれぞれ固有の仕方
で「言葉への態度」が、知恵に至る道に本質的だったけれど⁵
も、グノーシスにとつてはどうか。至高の根源の「一」が
思考と存在の「二」に分裂し展開するという「流出」「ソ
フィアの過失」は、言語の弱さに起因するかあるいは関係
するのだろうか。その墜落から反転して、グノーシスの
「神話は出来事となりつつある認識⁶」という止揚運動にな
るといふ。それは「人間が神話の内容にただ受動的に身を
任せるという次元を遙かに超える⁷」とすれば、弱い言語を
克服するメカニズムがどのようなものであり、文字が止揚
を起こす力動性はどこから生まれてくるのか。知識による
人間の救済を説くグノーシスで、その知識はどのような性
質であり、どのような「知へ至る道」があつたのか。

人間の言語の弱さへの周到な気遣いがないところでは、

かえって人間理性が無力化するのではないか、と恐れる。

そして「言葉嫌い」は「人間嫌い」でもあるなら（『パイドン』89c）、人間への愛も薄れかねない。グノーシスでは少数の選ばれた知者たちのみが救われるのではなかったか。

(2) ヨナスはグノーシス＝流出説としたが、その流出説が「古代末期全体……の巨大な枠組み」といわれる。他方でヨナスは、さまざまな形態のグノーシスがある中、特に神話的グノーシスと哲学的グノーシスを統一する視点としてハイデガーの実存論的分析を導入した。この実存論と流出説はどのように結びついているのか。流出説は根源からのこととして上からの展開であり、現存在を核とする基礎的存在論は下からの分析である。この逆ヴェクトルはどのように結び合うことになるか。

(3) バシリデース派の神話の「大いなる無知」は、樂園の禁断の善悪の知を思い出させる。「この先立ち入り禁止」という看板があれば、人は入ってみなくなる。禁止されて自由が刺激され発動するのである。パウロも苦しんだ自由の目眩である。今はただS・ヴェーユの「神が一人称で思考するというこの能力を（人間に）賦与したのは、愛によってその能力を放棄しうるためである」という言葉を

想起するに留める。

(4) ヨナスはハイデガーの実存論的分析を導入して、狭い反キリスト教思想としてのグノーシスを解放した画期的研究となった。そのヨナスが後にハイデガーを反キリスト教的思想として退けるに至った。こうしたねじれた関係を生き抜くのは難しいと思うが、その経験はヨナスにも大貫にも、キリスト教理解に何をもたらしただろうか。

〔2〕大貫氏の質問に対する答え

大貫『覚書』注8に、潜勢的可能性とエンテレケイア論を「種子」に喩えることは、アリストテレスにあるか、と質問がある。アリストテレスでは「種子 (sperma)」は「精液」とほぼ同義で、生物学的な意味で使われて、アリストテレス自身は比喩的には使っていない。骨子を述べれば、Xの種子はまだXではない。しかしXになりうる意味で、潜在的にXである（精液は可能態で身体である）『靈魂論』412a27。雌雄結合があれば、子が誕生して、現実態のXになる。「こころ（プシキケー）は、可能態で生命をもっている自然物の第一の完成態（エンテレケイア）で

ある」(412a27-28)。アリストテレスは次のようにも指摘する。「人が汎種子 (panspermia) と言っているのは、現実態で存在するのではなく、可能態であることを言わんとしている」(『動物生成論』769b1-2)。「汎種子」とは何にでもなりうるという「潜勢的可能性」ということだと思ふ(『ティマイオス』73c1でも)。それが特定具体のものとして発現することが誕生ということになる。完全現実態としてのエンテレケイアである。

〔3〕人間の願い(救いと完成)と祈り

グノーシスとプロティノス両者の中心課題をあえてシンブルに言えば、認識を介した、自己の救済(グノーシス)⁹であり、自己の完成(プロティノス)である。どちらも至極もつともであるけれども、自己の救済は宗教の目的だろうか。自己の完成は哲学の目標だろうか。どちらも自分のところの望み、それも飛び切りの願いである。しかし救いであれ自己完成であれ、自分の望みをアルキメデスの一点とすることは、肝心なことを失うことになるのではないか。たとえ「脱世界化」を目指して、この世界を超越した「彼

方」の根源へ最終的に飛翔しても、自己をそのまま「彼方」に移し替えただけでしかない。死後の神話と同様に、そこには死がない。自己は死んでないのである。自分のところからの願いと意志の貫徹があるだけである。しかし生命の秘密は、「自分のところを救いたいと望むものはこれを失い、わたし(真理)のためにところを失うものはこれを見出す」(マタイ16・25、マルコ8・35)という逆理にある。

プラトンの『ティマイオス』で、ティマイオスが宇宙創出論を語り始めるに際して、神への祈りをもってした。第一に、「何よりも神の眼に適うように」、そして第二に「われわれの目に適うように」(81c7-d4)、である。われわれの大抵の祈りは、「自分にとつて善」を祈り求めるであろう。合格祈願を始めとして、「家内安全・商売繁盛」が典型であろう。プラトンは後の『法律』で、自宅に社殿を建てることを禁じた(809d)。私的善を求める私的祈りを禁じたのである。祈りは無条件な善をこそ求むべきなのである(801c-d)。「すべての人間共通の欲求は、ところの望みのままのことが起きること」(88c)だからである。

従って先の第一の祈りは、神の眼にもつとも理に適った

ことになるように、とのことである。すべてのことにおいて神から離れることがないように、無条件な真理と善が実現するように、と祈るのである。従って祈りは自分の要求ではない。至極もつともな要求であつても、その実現ではない。むしろ自分の要求の放棄である（S・ヴェーユを想起する）。「答え」を求めるころの願いを死んで、このころの固執から解放されるよう求めることである。乙女マリヤに天使から受胎告知があつた時、マリヤの口から出た「仰せの通りわたしになりますように」（ルカ1・38）は祈りの極致といつてもよからう。

第二の祈りは、*ad hoc*な善の実現を願う祈りである。「われわれにとつて今日の話がうまくいきますように」ということである。昨日のソクラテスの話もクリティアスの話も「われわれの目には適つていた」（1745, 20d7）のである。⁽¹⁾しかし先後倒逆は許されない。

〔4〕ギリシア人の明暗の世界

グノーシスの世界像によれば、世界は、光から「落下」して生まれた闇の国である。世界は望ましいことより無惨

なことの方が多し。どう見てもロクテモナイ世界である。グノーシスが世界創造を下級の神、ヤルダバオートとしたのも、⁽²⁾さもありません。人間ももう少しましな存在であればよかつたのに。

「哲学の創始者」タレスの弟子、アナクシマンドロスは奇妙な説を唱えた、「存在するものにとつてそこから生成があるところのそれへ、消滅も必然に従つて起きる。存在するものはその不正の罰と報いを時の定めに従つて互いに受けるからである」（断片B⁽³⁾）と。細部には解釈上の議論が多いが、次のように解釈しても、本質を外すことにはならない。

有限の世界は無限無相の原理（*arché*）を根拠にした神的合一から分離して、事成りきつた結果である。人間の存在が、ちょうど母子一体の子宮宇宙から、子が切断されて個体となつた誕生の事実であるのと類比がある。そして存在するどんな有限有相のものにも根源的不正の影がある。存在する所以の根拠をそれ自身の内に掌握してないからである。自己原因（*causa sui*）でまかつたくないのに存在している。それが「不正を犯して」ということなのである。「落下」と同じニュアンスであらう。

確かに何一つとして自分で自分を作ったものも生んだものもない（『動物生成論』735a13、『動物運動論』700b1-3）。およそ主体性も自由も自己自身もなく端的に生まれたのである。原初受動性と呼ぶこともできる（I was born）。受動するものもなく受動した結果があるだけである。

そこに「原初の不正」がある。どんなものにとつても本質上、自分自身だけで存在充実の完結性をもちえない。必ず欠乏欠落に苦しめられる。そして自らの存在を維持し確保する努力をつづけなければならぬ。それは植物も動物も人間も違いがない。生まれるとすぐ食うか食われるか、の生存競争である。植物でも「日の当たる場所」を求めて競争する（パスカル「そこは僕が日向ぼっこする場所だ」）。命輝く春夏から枯れる冬、その冬は追われて春になる、と変転する自然に具象化されるように、「時間の定めに従って互いに罰と報いを受け続ける」ことになる。

しかし生物の生存競争は自然の本性の傾向性と本能に従ったものであり、必要な形と程度のことすぎない（則を超えず）。そこには「原初の不正」があるのみで、それを新しい不正の種にはしない。

しかし人間だけは新しい不正を生み出す（大貫の「知の

存在論的不安¹⁴）が強く関係すると思う。それが「原初の不正」の操る現実の結果なのである。欺す、嫉妬する、中傷する、裏切る、盗む、奪う、傷つける、奴隷にする、殺す、それも夫婦の間で、親子の間で、兄弟姉妹の間でも殺し殺され、そして他国の生命・財産・土地を破壊し収奪する戦争に至るまで、ありとある不正が人間の行為に開かれている。それはギリシア神話と悲劇の何よりの素材である。自分の存在の核に空洞があり、かつ世の悲惨を目にして、ギリシア人も怯んだであろう。「この世に生を受けないのが、すべてにまして最善。生まれたからには、きたところ、そこへ速やかに赴くのが、次善」（『コロノスのオイディプス』1294-1298）、とソポクレスは歌った。エウリピデスにもテオグニスにも似た言葉がある。ギリシア人共通の「生まれなことが最善」という人生災厄説である。単に「世界は人間の郷里¹⁵」とばかり思っていたわけではない。

ところが「地上に生息し、這い回る生きとし生けるもので、人間ほど惨めなものはいない」（『イリアス』17:446）と歌ったホメロスは、誰よりも英雄たちの際立つ姿を生きた生きと歌ったホメロスである。

英雄を賛美したギリシア人は、決して手放して賛美した

のではない。勝者も敗者になり、恐怖に足を竦ませ、家族や友人を思つて憚らず泣き、嘆願するために他人の前で膝を屈するのである。状況の相対性、流動性という偶然の前で脆弱そのものである個人をギリシア人は認めた。神々ですらモイラ運命に逆らえないとしたのであり、「生まれてこなかった方が良かった」。一寸先は闇であり、現実の脚下に人間の視力が届かない深淵が開口していた。世界は決して自分が思うような世界ではないし期待するような世界でもなく、無理無惨な力を振るう世界の前で人間は小さく惨めで弱かった。

それにもかかわらずその脆弱な人間が、自分は世界の中でどのような位置を占めるか、そして「自分が何ものであるか」を明らかにし、もつて個人としての自分を証明・定義しようと、神々と運命と偶然に抗い冒険する個人をギリシア人は英雄と賛美したのである。身の破滅を冒してもこの人生の冒険を敢行した代表が、『イリアス』のアクレウスであり、『オデュッセイア』のオデュッセウスであり、そしてソポクレスのオイディプス王である。世界の力の前で破れることにおいても英雄であった。惨憺たる栄光である。しかしそれは人間に可能な高貴さである。「人間の卓

越性である）徳は艱難によつて現れる」（エウリピデス『ヘラクレスの子供たち』⁹³）からである。陰惨な人生の中でも輝き出る人間の高貴さとは、人間が世界の力の前で砕けることを知っている存在ということであり、世界がこれに見合う、そしてこれを支える明るさに満ちているということでないか。世界は宇宙的ゴミ捨て場でも便所でもなかった。グノーシスにとっては、「臭気を放つこの身体」¹⁶でしかなかったが、それでは輝きようがない。世界はとても人間の愛せる世界ではなかったのである。

ギリシア人の「生への愛」はよく知られている。ホメロスの作品に出てくる日常生活必需品も武器もすべて美しい¹⁷。壺絵も生活の細部に至る優美さに溢れている。ギリシア人にとつて世界は非魔術化されて美に溢れていたのである。オデュッセウスは、女神カリリュプソからここに留まつて不老不死の命を共に楽しむよう誘われた時、美でも丈でも比べものにならないほど劣る、しかし愛する妻ペネロペの待つ国に帰りたい、としたのである（『オデュッセイア』⁵³¹⁸）。「生まれなかったが最善」としたギリシア人は、この世界は人間が生きるに相応しい、愛することのできる世界とも考えていたのである。光が闇か、どちらか一色で塗り固

める「すべてか無か」の対極二元論ではなく、バランス感覚のある両義性である。だから一義的な「有るか無いか」を探究したバルメニデスが、ギリシアの伝統の中で唯一例外、とされたのである（『テアイテトス』122e）。

〔5〕プラトンの二元論克服の努力

——『テイマイオス』管見

グノーシスはヨナスにとって「反面教師」だった、と大貫は指摘する¹⁹。筆者にとっても多少似た対置づけとなる。グノーシス批判をものしたプロティノス自身にもグノーシスの「擬態」が隠れており²⁰、その擬態の裏表についてヨナスが詳細な分析記述を与えている。しかし新プラトン主義の本家本元のプラトン自身は背景に退いている。ここでは時代は前後が逆になるが、そのプラトンの二元論克服の努力を、グノーシスもプロティノスも言及した作品『テイマイオス』において具体的に素描しておきたい。ただし限られた論点に絞られる²¹。

旧稿において『テイマイオス』冒頭を簡単に分析した²²。それと一部重なるが、よりグノーシスに関連づけてもう一

度見ることにする。プラトンの対話篇はその冒頭のシーンが対話篇全体のテーマの象徴となっていることは、新プラトン主義のプロクロスの指摘するところであった²³。『テイマイオス』でも色濃く反映している。以下四点を指摘する。

（1）「一人、二人、三人。おや、四人目の人は、テイマイオスさん、どこですか」というソクラテスの問いかけで始まっている。昨日ソクラテスは、プラトンの曾祖父クリティアスとイタリア・ロクロスからの外国人テイマイオスとシシリ島のヘルモクラテス他一名、計四人を客に招いてもなしのご馳走をした。『国家』の話をしたというのである。言葉による歓待である。それで今日はその四人がソクラテスにお返しのご馳走をする約束であった。それが一人欠席である。その人は病気が何かで欠席だが、残りの三人が欠席した人の分も補ってでもてなそうというのである。

他の対話篇は、ソクラテスとアテネを中心としたギリシア各地のポリスの市民が登場人物であるが、ここでは中心が外国人である。その「外国人、客」「もてなしのご馳走をする」はギリシア語で *xenos* と *xenizein* である。*xenos* は元来「見知らぬ他所もの」のことである。他所ものはど

んな時代のどんな社会でも不安要素である。²⁴ 異質でよく分からぬ、それだけ気味の悪い「外のもの」だからである。グノーシスにとって世界は馴染めず恐怖の異郷であり、人間あるいは自分はそこでは「他所もの」であって、ヨナスはその「他所ものなるいのち」がグノーシスの最大の象徴だといふ。²⁵ そこでグノーシスは恐怖と不安から救われるために、異郷の大地を逃れていく「脱世界化」が図られるのである。明らかのようにグノーシスにとっては、「自分が本来他所もの」であることに覚醒することが鍵であった。²⁶

市民の日々の生活の場であり、人生の跳躍版でもあったポリスが崩壊し、コスモポリスという漠然とした世界にポリと投げ出された個人としての人間の姿であろう。

自分たちの社会に入ってくる他所ものは不安の種である。その不安を除く方法は一つしかない。他所ものを消すこと。ある社会から取り除かれた他所ものは歴史上無慮無数いる。二〇世紀には六百万のユダヤ人がドイツ社会から抹殺された。

しかしギリシア人はもう一つ他所ものを消す方式を考案した。他所ものを客として受け入れ、食事をともにする歓待である。²⁷ 「他所ものを歓待するゼウス (Zeus ho xenios)」

はギリシア人に他所ものを受け入れ歓待することを命じている。同じ釜の飯を食う「われら仲間」である。そこには明るい光がある。

われわれは先行的に一つの見通しを与えることができる。口は物を食べ、生命を維持する根源的な、自己保存の本能に直結する器官である。生存競争に直結する。それは「最初の不正」以上の新しい不正に曝されつづけているということである。ユダヤの知恵は「人は一切れのパンのために罪を犯しうる」(『箴言』28・21)と肺腑をえぐる。またもつとも重要な物をパンと引き替えにすることも起きる。エサウはパンと部族の長子権を交換した(『創世記』25・32―34)。このように口は、自己中心主義を象徴する器官でありながら、一緒に食ふことは他所ものを歓待の内に消し、「われわれ」を新しく生み出すことになる。

加えて口は言葉を語る器官でもある。他人との交流のもつとも重要な器官である。物を自分の「内」に取り入れる器官は、言葉を自分の「外」に向けて話す器官でもあった。言葉の歓待である (ta ton logon xenia, 20c1)。ギリシア人が飲食を共にしながら、寛いだ雰囲気の中で自由に語り合う宴会形式のシユンポシオンを重要な社会生活・青年教

育の一環としたのも、十分な理由がある。

このようにプラトンは口を、生存に必要なためであり、かつ言葉と思慮のためである、とその両義性を指摘している (759a)。従って口は人間の墮落下降を象徴しているが、上昇する高い次元の秩序にも属している。下降と上昇は切り離せない。

今日、ソクラテスはティマイオスら四人から歓待を受けることになっている。こうして『ティマイオス』は他所もの、異質の要素を受け入れ新しい調和ある秩序と新しい善を生み出そうという構想をもって始まっていた。

(2)ところが一人欠席している。世の中には想定外の不都合や困ったことが起きるものである。しかし欠席したその人は病気であって、態と悪意から欠席したのではなかった。それは次のことを象徴している。

世界には天変地異が避けがたく、災害や事故、争いや病気などろくでもないことが次々と起きる。ナンデモアリだ。しかしこの事実が世界が悪意に満ちた邪悪な意志に支配されていることを意味しない。もしそうした支配の世界であれば、「態と自ら進んで悪人であるものはいない」(89d)

c1. 『法律』(712a3, 860c1)とするような、われわれの善悪の判断、意志、行為の枠組み全体とまったく異なる。従ってわれわれ人間とは何の共約性もない、完全狂気の狂人主宰の世界とならざるをえない。善を求め、悪を避けようとするわれわれ人間の努力をあざ笑うように、刻々と躡かせた狂気の暴力しかないからだ。その時初めて人間は生きることに何の責任も帯びないのである。世界は、一方が必ず勝つ規則によるゲームに等しく、ゲームに参加する意味を失うからである。それは光のない闇世界である。しかしグノシスにとっては、世界の創造神は二流以下のヤルダバオートであり、その邪悪な霊だとしたのである。そして悪霊が人間の内的精神生活を支配する。コスモスすなわちスコトス(闇)であった。⁽²⁸⁾

「生まれなかつたが最善」としたいほど、ろくでもないことが次々と起きる偶然の介入する世界ではあるけれども、世界は、われわれがその不都合な欠落を受け止め補うことのできる、つまりわれわれ人間がこれに真剣に向き合うことができ、何らか応答することのできる世界である。偶然はまだ偶然ではなかつた。しかしそれは世界が樂園ではないことを無条件に承認する覚悟と忍耐と釣り合っている

る。

(3) 昨日のソクラテスの歓待は『国家』の話であった。

今日、まず手始めにそれを要約し、新しい言葉の歓待に繋げることになる。そこでソクラテスが国家の守護者の話を中心に簡単に紹介している。しかしそれは『国家』第二巻から第五巻までの話であり、十巻全部の要約ではない。「要約 (Kephalaion)」は「頭 (kephale)」と言葉が響き合う。つまり今日ソクラテスが『国家』の要約として話したのは、『国家』が守護者という国の頭の話だった、ということの象徴なのである。支配する守護者が最善のものになれば、国家も最善のものになる、とプラトンは『国家』を書いたときは思ったのである。最小の変化で最大の効果を上げるには「頭」に集中することだ (473b-c)。

しかしそれはいまや歪んで見える。それは最善の国家構想のメインロードではない。国には生活道路も裏通りもある。従って国家は、ネットワークのように頭が頭以下の部分と結びついて、支配者と市民が有機的につながって活動する生きた全体でなければならぬ。人間の現実を全体と

して視野に入れ把握するための基礎論が、今や必要だということである。

(4) クリテياسが返礼の一番手として話したのが、アトランティス軍の侵略を撃破した、九千年も昔のアテネの栄光物語である。当のギリシア人が誰も記憶してない過去の話である。それをエジプトの神官からソロンが聞いたことに始まる幾重もの伝聞による昔話であるが、クリテياسはそのアテネが『国家』の「最善国家」だ、これこそ物語から歴史の事実への転換だ、とするのである (360c-d)。そして自分の話を「真実のロゴスだ」(300f7g)と豪語している。⁽²⁸⁾

それに対してティマイオスは政治でも哲学でも頂点を極めた人 (20a) と紹介されている。その人が話すのが宇宙創出記である。クリテياسの話は、九千年前のアトランティスの事件である。大昔とはいえたかが九千年であり、地中海世界の外とはいえ、ヘラクレスの柱のちよつと先である。時間空間の中の特定の事実には過ぎない。誰が勝者か敗者か、どの国がいつどこでどんな成功を収めたか、「最善国家」を実現したか、ということは時空という世界劇場

の中のことである。アテネの栄光を相対化するように、今日の出席者の一人、ヘルモクラテスは、アテネのシシリー島遠征軍を撃破した将軍として歴史上有名である。

しかし時空の中の事実について語る前に、その枠組みの世界劇場そのものの話(あるいはその舞台裏にも視線を送る分析)が先決問題である。ティマイオスが宇宙創出論を語ったのは、時空の中の出来事と運動を研究していたそれまでの物理学に対して、アインシュタインが時間空間それ自身を研究する新しい物理学を創始したのに似ている。世界はなぜ無ではなく存在するのか。人間は生まれなが最善であるのに、なぜ存在するのか。宇宙でいかなる地位を占めるのか。従って『ティマイオス』を昔のギリシア人の話だ、と解したらとんだ誤解である。

さてその宇宙創出論である。ティマイオスはそれを、クリティアスの「真実のロゴス」と対比して、「比較してまじな (médenos héttou. 29c7)」「もっともらしい話 (ho eikós nthos. 29d2)」と性格づけしている。⁽³⁰⁾宇宙生成についての「わたしの意見 (kat' emén doxan. 27d5)」の紹介ということである。誰も権威としていない。しかしティマイオスは

その際に、「最大限考えて (dianounai maista. 27d3)」話すと約束している。つまり悪霊のようにありもしないことでも人を誑かそうとする邪悪な意志はない。自分が真実と信じること (pistin. 29e3) を他の人と分かち合うことに「嫉妬」もないのである (29e1-c)。信頼してもらってよい「もっともな話」である。よく推理し理解し判断した話だからである。以下で見ると、ただの物語以上に筋の通った合理的なロゴス (ho eikós logos. 30b7)⁽³¹⁾であり、「わたしのロゴス (ton emon logon. 4a1-2)」と云ってよい。

従ってソクラテスなど聞く人は、ティマイオスの「わたしの意見」を外から眺めることができる。ニーチェの「真理感覚」に従って言えば、「ではひとつ、試してみよう!」⁽³²⁾ということである。色々な可能性を突き合わせ、解釈し、評価することができるのである。ティマイオスは話を始めるに当たって、ソクラテスたちを「判断するもの」(hoi krinai. 29d1)と呼んでいる。話を聞いて、理のあるところを発見し、「つまり学んで (an huneis men mathoite. 27d2)」、自分で判断してもらいたい、ということである。

この「判断するもの」には後に (71e-72b)、神託、詩人と関係して重要な但し書きがある。一般に予知、予言、占

いなど神意を人間に伝えると見なされている人たちは、夢か狂気か神憑りになって忘我の境でことを行うものであり、思慮なきものというべきである⁽³³⁾。神憑りになってなんらかのメッセージを臆気な影のまま受け取るのは低位の能力であり、その謎 (H. anigmōn, 72b3) を解釈し評価し判断するのは上位の知性の力である。その知性の持ち主が「判断するもの (krias, 72b1, hypokriai, b3)」のことである。それは神託の謎や他人の言うことを聞いて、「その言っていることの意味は何か」を自分で推理し、目覚めた精神で解釈を試すものである。「ソクラテス以上に知恵のあるものはない」というデルポイの神託に接して、この謎解きに邁進したソクラテスにその具体像を見ることができると「ソクラテスの弁明」20d-23c⁽³⁴⁾。

いま『ティマイオス』において、ティマイオスの話を聞くソクラテスたちは、テキスト外の著者プラトンの文脈で言えば、われわれ読者ということになる。果たしてわれわれはよい判断者であろうか⁽³⁵⁾。ではひとつ、試してみよう。

元に戻る。それにもかかわらずティマイオスの宇宙生成についての「合理性のあるロゴス」は、必然の連鎖による首尾一貫した厳密な証明 (29b) ではないし、ソクラテス

が日々市民一人一人と実行した、一語一語を吟味の破壊実験にかける批判的問答でもなかった。信頼に足りても、真理の権威をもつわけではなく (29c3, 72d4-7)、やはり生成という現象についての「もつともらしい話」というレッテルを受けるべきものである。人間の言葉はそのまま真理を具現できるほど強くなく、言葉も偶然に影響され、曖昧に流れることを避けえない (34c3-4, 46a5-6)。ティマイオスは 29d1 でそれを「人間の本性」と呼んでいる。

宇宙創出の物語の主役は造物主とも創造神とも訳されることの多いデミウルゴスである。ここではそのまま使用する。そのデミウルゴスが宇宙を作る動機が語られている。それはデミウルゴスは善きものであり、善きものにはどんな嫉妬もない、ということであり、そして嫉妬無縁なので、すべてのものが可能な限り自分に似たものになるように願った (29e1-3)、ということである。ティマイオスはこの出発点 (arche) は、思慮ある人間も受け入れるだろうと請け合っている (29e4-30a2)。善いものの拡大自身も善いことだからである。つまり潜在的な聞き手として、話を受け入れる人々を念頭にしている。しかしそれ以上は要求しな

い。従って知識のような普遍妥当性を要求しない。ロゴスはロゴスでも拡張されたロゴスである。

そのデミウルゴスの宇宙創出のこの次第（願いと意志と推理）は、グノーシスの光源から光が映出するのとも、プロテイノスの泉から水が湧出するのともまったく違つて、次の通りであつた（30a-d）。デミウルゴスは素材として見える物をすべて受け取つたが、秩序もなく動くカオスなので、秩序の方が無秩序より善いと考へて、これに秩序を与えた。考へないままの寄せ集めが、理性による秩序ある全体より美しく整つた作品になる、などという偶然の僥倖はないし、しかし理性はこころ抜きではどんなものにも備わることとは不可能である、と推理した。そこで理性をこころに結びつけ、こころを身体に統合して宇宙全体を組成した。可能な限り美しく最善の作品を仕上げようという見通し（*pronoia*. 30c1, 44c7, 45b1）の下であつた。

これはティマイオスが言うように、十分筋の通つた「合理的なロゴス」の推理であることは間違いない。しかし謎はある。第一に、デミウルゴスは見える物を受け取つて、その無秩序な運動に秩序を与え、筋道だつた構造化を図つたたのである。これはパシリデースが創造でも流出でもな

い、といったものに他ならない⁽³⁷⁾。無からの創造は、どんな可能性もない無、つまり不可能性に直面して愛によつて新しく始めることである。考へられる可能性の中をあれこれ推理して最善を選ぶデミウルゴスは、「宇宙の作者、父親」(28c3) ということを除けば、人間と同じように見える。「推理」を強調すればするほど（31b1, 4, 33a6, 34a8, b1, 36c6）、創造とはかけ離れて、人間と等しく見える。ティマイオスも先にデミウルゴスの推理と人間のそれが一致するだろうと指摘していたのである。われわれも何を作るにせよ、目的という未来の見通しの下で開けてくる所与の事実の色々な可能性を試しながら比較考量し、どれかを選んで未来を引き寄せるからである。ハイデガーはそれを「投企 (Entwurf)」と呼んだのである。

デミウルゴスの次の推理は、理性からこころ、こころから身体へと展開し、宇宙を理性ある、生きた生物 (30b8) としたのである。しかし第二の謎がここにある。大工が家を造る際に家に理性を植え付ける必要はない。家ができた後に必要があれば大工が補修作業をすればよい。しかしデミウルゴスは宇宙創出に当たり、宇宙を美しく作るだけで足りないと思つた。宇宙に原因としての理性を与えたので

ある。

従ってデミウルゴスは、自分に似て、しかしある意味では自分から独立して自律した理性ある存在として、宇宙を作ったことになる。プラトンは最後の対話篇『法律』で、実現可能な最善国家のための法律体系を作った。そして立法の最後に「夜明け前の会議」という組織を付加した(961c6, 962c11, 968a6-n1)。国政を担う人びとの、私的生活と公的生活の隙間のような「夜明け前」に開催される、法律の研究と教育の組織である。法律は一度作ればそれで済むわけではない。社会の現実はずえず変化し、法律はその社会に対して絶えず研究と教育によって発展強化しなければならない。「夜明け前の会議」は法律の保全策なのである。プラトンが巧妙だったのは、その会議を法律によって定めた制度にしたということである。つまり法律が法律自身によって守られる自己保全の体系である。法律が「生きた法律」になったのである。自ら動く「自動」が生命ということだった(895c7-8, e10-896a2, 『パイドロス』245e4-6)。デミウルゴスは同じように宇宙に自分で自分を守る生命体を期待したのである。その責を担ったのが人間である。

宇宙の根本要素である地水火風の四元を結合して宇宙と

星々を創出したデミウルゴスは、「わたしが願わなければ」解体不能と宣言する(41a8, 323c4)。結合されてきたものはすべて分解するのが自然である。デミウルゴスの理由は、美しく善い状態にあるものの解体を願うことは、悪しきもののできることであった(41b1c)。暴力団は解散させるべきであるが、人が立派に運営されて順調な組織を解体するとすれば、ニコニコ笑いながら「君が嫌いだ」と言う人が狂気じみて気味が悪いように、ただの気紛れ以上に底意地の悪い不気味さを示す以外ではない。しかしデミウルゴスは「嫉妬無縁」で邪悪な意志とも無縁だったのである。

しかしもしも宇宙が既に美しくなく、また善くもない事実には汚染されていたとすればどうか。宇宙は解体の危機に直面するであろう。現代に目を転じて見れば、核戦争という、世界の壊滅的破局の可能性、地球温暖化と環境破壊、人口爆発と食糧危機、格差の拡大などグローバルな諸問題が次々と解決もなく起きていく。すでに月でさえ将来の資源獲得競争の影が蠢いているという。遠い未来の宇宙時代でも、人類は現在と同様に次々と新たな問題に直面するであろう。人間は「原初不正」を負っていたのである。

ティマイオスはまるで運命の法のように、人間が避ける

ことの不可能な事実が起きる現実を指摘している。悪へ
唆す快樂、善を避けようとする苦痛、思慮なき血氣と恐
れ、宥めがたい怒り、そして迷いやすい期待 (god)。狂氣
と無知 (god)、病氣 (die)、愛欲 (42a, 69d, 91b)、欲望と野
心 (90b)、老化 (die)、そして死 (die) などである。これ
らは避けることが不可能な必然の力で、しかしいつ、どの
ように起きるか予測困難で盲目的な偶然性で、人間の現実
を侵襲する。そしてできる限り善き人生を生きようとする
人間を刻々と躓かせる、拭っても拭っても粘り着き消えぬ
欠乏であり障害である。人間は理想的世界の理想的人間で
はなかつた。

その人間の現実には、デミウルゴスが宇宙を創出するのは
無からの創造ではなく、従って「最善理想」の質料でも
なく、既に固有の本性と構造、能力と性質をもった地水
火風の四元を素材事実として受け取り、これを「副原因」
(Gg) として使って作品化する以外にない、その必然性
の結果を反映している。ティマイオスが人間の頭脳につい
て、脆弱で短命であるが、繊細精妙で理的である構成を
選択したこと (75b-c) をパラフレーズすれば、鉄より強い
筋肉をもつ人間を作ろうとすれば、ワニやカブトムシのよ

うに鉄面皮な顔の持ち主になろう。とてもこのころのこもつ
た顔などは想像できないし、「顔はこのころの最良の像であ
る」(ワイトゲンシュタイン)⁽³⁹⁾ などということも起きようが
ない。素材事実の避けられない制約条件を無視した「スー
パーマン」は、考えられる可能性をあれもこれも手放さな
い子供の空想なのである。筋萎縮症に苦しめられるホーキ
ング博士は脳が筋肉でなくてよかつた、と漏らしたという。
自分に不利不都合な点を受け入れることが、プラトンのデ
ミウルゴスの徴である、とは G・モローの卓見である。⁽⁴⁰⁾ そ
して人間もその同じ徴を帯びている。運命の枷をその身に
帯びて、微妙脆弱な生き物だったからである。

そして忘れてはならないのは、宇宙は悪霊の邪悪な意志
が支配しているのではなかつたことである。デミウルゴス
であれ人間であれ、避けがたい必然性で盲目的な力が、宇
宙と人生を作品化する努力に障害となつて止むことはない
が、その事実は理性がまったく「説得」不可能な狂気の要
素ではなかつた。異質の「彷徨う原因」(Gg) ではあるが、
色々可能性を試しながら「説得し、説得され」、納得した
ら受け入れ (Kenntnis)、栄養として新しい実りを生むチャ
ンスになるというべきである。人間が善い人生と行為を選

んで生きることが可能にする一要素である。あの避けがたい事実の必然性がなければ、われわれが真剣に求める筈の幸福な人生の、その真剣さが子供の遊び (36c1, 59d2) のように空洞化し空転するからである (68a6-69a5)。人間が心身両面にわたって、これを配慮し、改善し、秩序づける治療、体育、教育・学習が意味をもつのもその故である。

既に紙数を越えた。「見通し」の話で終わりとしよう。世界は善美を写し宿す限りは、解体を免れるかも知れないが、しかし世界は少しずつ結び目が緩み解け始めているのではないか。アリストテレスは時間はどちらかといえば消滅の原因と指摘した (『自然学』321b1-2)。エントロピー増大の法則に似て、時間の中に存在するとは、少しずつ無秩序へ緩やかに滑る下降傾斜に在るということである。クリティアスが語った九千年前のアテネの栄光も大地震と大水が襲って解体消滅し (35c7)、記憶の彼方に消えたのである⁴¹。人間が心身両面において避けがたい障害を受け続ける脆弱性を負っていることは、先に見たとおりである。そしてその障害に足を掬われて下落する人間を、ティマイオスは鳥、獣、魚に変身すると表現してゐる (91d-92c)。宇

宙は人間という局所において、あるべき姿から逸脱しうるのである。

楽園の時代は終わった⁴²。その失楽園の現実に直面する、「夜明け前の会議」に比すべき宇宙の理性はいずこにある。宇宙はこれを作ったデミウルゴスの自己射影であったが、宇宙の中に位置を占め、球形宇宙に似た丸い頭にデミウルゴスから受けた神的理性を宿す人間 (41d3)こそ、宇宙を代表し具現化するのであるまいか (マクロコスモスとミクロコスモス)。生物の中で人間だけが身心にわたって詳細に語られ、そして人間は大地に足をおいて直立し、頭上高く天に根を置く植物 (903a7)と譬えられたのである⁴³。

とすれば人間が自分の人生作品化を推進しつつ、美しく善い宇宙を維持する努力を止めれば、デミウルゴスは宇宙の解体を許容するであろう。つまり宇宙のあり方は人間次第、ということがある。人間はある時にこの世に誕生し、永遠の影でしかない「過ぎゆく時間」(37d7)とともに幾何かの時間を生き、やがていずこともなく消えていく、生成世界の現象に過ぎないが、唯一自らの存在に関心をもつところの存在である。その人間は自分自身のあり方に関心をもつことで、宇宙のあり方に巻き込まれている。人間は

自らの存在を通して、宇宙に存在を与えるのである。

「何を馬鹿な」と言うだろう。テイマイオスがしているのは「もっともな話」である。言葉の弱さを知って、なお語る危険を冒すべきだ(22d8)、として語っている。その話の一部は、存在と生成を結び合わせる混合である(20e2c)。存在を生成と交わせ、生成を存在に与らせること、これである。こうした問題構成を背景に言いうることとは、人間は宇宙の中の一部であり、同時に、宇宙全体に応答を迫られる存在ということである。「天人合用説」は易経の知恵でもあった。

なぜ世界は無でもよかつたのに、存在するのか。なぜ人間は生まれなかつたが最善であるのに、生きているのか。世界は人間が生きるに相応しい。そして人間は世界に生きるに相応しい。そして宇宙はわれわれが共有するに相応しい。しかしその相応しさは、自明でも与えられる事実でもなかつた。人間によって作品と作られるべき相応しさということである。美しい宇宙、善き生がその作品である。緩み解ける世界の紐帯を宇宙の中に棲む人間が結び直すことが求められている。自立した生物たる宇宙は人間の協働を必要にしている。別に表現すれば、われわれ人間は世界の

あり方に対して何らか応えることができる、またそれが期待され、責任もあるということである。頭が全身の中樞結節点であつたように、人間が宇宙の自律の集約点だろうかである。

言うまでもなく現代では人間も地球も宇宙の中心でないことはますます明らかであり、人間は宇宙の片隅からその巨大さに直面させられている。恐れと驚きはますます強い。しかしその事實は、現実⁴に直面する何であれ、死の間際にいるごとくこれを真剣に受け止め、何らかの仕方⁴でこれに應える責務があることを免除してくれるわけではない、「ここにもまた神々はいましたもう」(「動物部分論」(G15a17)ならぬ)。

ところで今日の言葉のもてなしに欠席していたのは誰か。テイマイオスの宇宙論に不在であつたのは何か。それは神であろう。宇宙生成という現象世界の成立に神は現象していない。宇宙創出を担つたのは、デミウルゴスである。しかしデミウルゴスは全知全能の永遠の神ではなかつたし、その業は無からの創造でもなかつた。デミウルゴスにもできないことがあつた。所与の事実を受け取り、そこに包蔵される可能性を内に外に披き、未来を引き寄せる以外では

なかった。望まじからざる不利不都合という異質の要素に直面して、これを受け入れ和解する、和解しようとする点で、デミウルゴスは人間に似ていた。デミウルゴスは生成を司るに際し、協働者（『法律』906a4-5）ともいべきもの（作られて作るもの）を必要ともしていたのである（177p）。もし「神…デミウルゴス…デミウルゴス…人間」という類比が成立するとすれば、デミウルゴスは人間のモデルあるいは哲学者であると思ひ描くことも、すべてが一義的決定性で説明されるのではない意味で、「もつともらしい話」ではある。で君の判断は？

（東京大学名誉教授）

註

* ヨナス①は、ハンス・ヨナス『グノーシスと古代末期の精神 第一部神話論的グノーシス』（大貫隆訳、ぶねうま舎、二〇一五年）、ヨナス②は、同『第二部神話論から神秘主義哲学へ』である。

（1）大貫「ヨナス・シンボジウムへの覚書」一頁。

- （2）ヨナス②三〇頁。
- （3）J・E・ハリソン『ギリシアの神々』（船木裕訳、ちくま学芸文庫）参照。
- （4）宮本久雄『他者の風来』（日本キリスト教団出版局、二〇一二年）八〇―八二頁。
- （5）その一端については、「アテネとエルサレム―言語と存在をめぐって」（宮本久雄編『ハヤトロギアとエヒエロギア』教友社、二〇一五年）二三五―二六九頁）で扱った。
- （6）ヨナス①三三〇頁。
- （7）ヨナス②一六頁。
- （8）『前キリスト教的直感』（今村純子訳、法政大学出版社、二〇一一年）一六三頁。
- （9）救いは主観の自己実現ともある（ヨナス②一八頁）。
- （10）グノーシスは広範な思想潮流だから、神秘主義の「脱魂状態における人間本性の消滅」（ヨナス②一七―一八頁）のようなケースがある。
- （11）イアンプリコスに、現世利益型の祈りと、超越的存在・原理を想起する手段としての祈りの区分がある（中西恭子『ユリアヌスの信仰世界』（慶応大学出版局、二〇一六年、八〇頁）。祈りの本質についてトマスは、「祈りが目指すのは、あなたにあなた自身の判断のままに従わないように教えることである」というヒエロニムスを引用している（『神学大全』II:2, 1868）。

- (12) ヨナス①四九九―五〇〇頁。
- (13) この断片の解釈は、ニーチエ、ハイデガーその他多い。それだけ謎が深い。
- (14) 大貫二頁。
- (15) ヨナス①一七五頁。
- (16) ヨナス①一三〇頁。
- (17) J・ド・ロミイ『ギリシア文学概説』（細井敦子・秋山学訳、法政大学出版局、一九九八年）三九―四二頁参照。
- (18) ヨナスは、この対極二元論をグノーシスに、相対的階梯秩序をプロティノスに配して、両者は「根本的に違う」とする（②三二八頁）。その違いは「あまりに明白で、あらためて注釈の必要がない」（①五〇頁）。しかしそのプロティノスにもグノーシス形而上学が背景に潜んでいるとするのがヨナスである。ここでは「プロティノスは自分の肉体の内にあることを恥じるように見えた」（『プロティノス伝』）ということを指摘することに留める。これがポルピュリオス編集のいわゆる『エンネアデス』冒頭第一行である。
- (19) ヨナス②四五―四頁。
- (20) ヨナス①七、五一、二八九頁。
- (21) それまでプラトン後期とされた『ティマイオス』を中期に移すオーエンの提案については、ここでは触れない（G. E. L. Owen, "The Place of the *Timaeus* in Plato's Dialogues",

- (M. Nussbaum ed., *Logic, Science and Dialectic* (London, 1986) pp.65-84)。イデア論そのものは本稿の中心課題ではないからである。しかし『国家』の理性第一主義に對して、『ティマイオス』は身心全体としての人間により多くの意味を求めており、また存在と生成が不可分で、むしろ「場 (chora)」において結びつく、という構想 (48e-52d) は後期のそれに似ている。
- (22) 『プラトンとグノーシス主義』（大貫隆他編『グノーシス陰の精神史』（岩波書店、二〇〇一年）八三―九六頁。
- (23) W. K. C. Guthrie, *A History of Greek Philosophy, vol.4* (Cambridge, 1975), p.2. 拙訳『プラトン 饗宴』（東京大学出版会、二〇一六年）一七―一八〇頁参照。
- (24) ソクラテスはその裁判において、自分がアテネでの裁判には馴染みがないので他所ものように弁明する、と始めに人びとの注意を喚起している（『ソクラテスの弁明』173a）。裁判の常道のように、無罪を勝ち取るうとはしないからである（アテネの他者！）。従ってソクラテスは被告として裁判に臨んではないということである。ソクラテスが「裁判官」という呼称を使うのは、裁判が終わってからである (40a2)。つまりソクラテスに無罪投票をしたものに対してのみ初めて、「裁判官」と呼びかけている。
- (25) ヨナス①一一〇頁。

- (26) 同上二二頁。
- (27) 英語の *hospitality* (厚遇) と *hostility* (敵意) はそれぞれラテン語の同系の *hospes* と *hostis* からの派生である。
- (28) ヨナス①四九、二二八、二二二―二二二頁。
- (29) これに対してソクラテスは「作り話をこしらえたりせず、真実のロゴスとは大したものだ」(26e4-5) と皮肉っている。
- (30) この *eikos mythos* については、「作り話」「神話」とも解されることがある中、バーニートがそうした「もっともらしい物語」に反対して、実践的意味をもつ「合理的妥当性のあるロゴス」と解釈してゐる (M. F. Burnyeat, “Eikos mythos,” (C. Partenie ed., *Plato's Myths*, Cambridge, 2005, pp.167-186)。しかし実践的処方箋とするだけでは視野が狭くなることを恐れる。
- (31) 直前の *logisamenos* (b1), *logiston* (b4) を受けているので、ただの「もっともらしい物語」ではない。「わたしの意見」以上に「わたしのロゴス」(47a1-2) である。
- (32) 『悦ばしき知識』(信太正三訳、ちくま学芸文庫) 第一書 五一節。
- (33) アリストテレスもよく夢を見て予知をするのは、外からの影響を受けやすい普通の人と指摘している(『夢のお告げについて』463b17-24)。
- (34) ソクラテスが神託の謎に直面して、その意味を自分なりに探究した結果の判断を「のようだ (Kinduneuei2344, phanetai:a8)」と表現している。
- (35) 政治における判断力については、H・アーレント『カント政治哲学の講義』(浜田義文監訳、法政大学出版局、二〇〇五年) 参照。
- (36) *Enneades* III, 8, 10.
- (37) 大貫七頁。
- (38) 『ティマイオス』が他の宇宙論と違って際立つのは、この副原因を真剣かつ徹底して扱ったことにある (G. R. Morrow, “Necessity and Persuasion in Plato's *Timaeus*,” (R. E. Allen ed., *Studies in Plato's Metaphysics* (London, 1967) p.428))。なおデミウルゴスは文字通りには「人びとのために作るもの」つまり職人であるが、A. E. Taylor は、62c3 の *autos demourgos* を受けて、*autogous* は自分の手を使う百姓であり、この著者(プラトン)は「わたしは仕えるために来た」という原理を理解していた」と想定するも可なり、としている (A *Commentary on Plato's Timaeus* (Oxford, 1962), pp.495-496)。これに対して F. M. Cornford は、キリスト教の大文字の神とは何の関係もない、とにべもなく一蹴した (*Plato's Cosmology* (London, 1966), p.34-39)。いずれも性急である(『エウテイフロン』17d7, 『法律』762e2-3, 『政治学』1277b9-13 参照)。しかし両プラトン学者の注釈には多くを教えられた。

(39) もちろん捏造である。ワイトゲンシュタインが実際に言ったのは、「人間の身体は人間のこころの最良の像である」(『哲学探究』第二部第四節)だった(ほぼ同時期の一九四六年の *Culture and Value* のメモでは、「人間の身体」は「人間」になっている)。

(40) G. R. Morrow, *The Cretan City* (Princeton, 1960) p.11.

(41) エロスを話題にした、ソクラテス出席の昔の宴会の記憶も臆気に消えつつあった時、「美しくなったソクラテス」を復活させて新しく語り直したのが、『饗宴』であった(前掲拙訳、一七二—一八〇頁)。

(42) プラトンの『政治家』に一つの神話がある。宇宙規模のカタストロフィーによって時間逆転が起き、楽園になって人間は神的羊飼いの世話を受けていた。そして再び時間逆転が起き、楽園は終わった。神は世界から退場し、人類の間に飢餓や不和、戦争が起きるようになった。その人間の世話をするのは人間だ、と自覚することから政治が始まった、という (SOSD 274d)。政治とは、人びとの共生を可能にする法と制度を確定して、市民に善き生を生きる安定したチャンスを与えることである。

(43) もし天に足をおいて、逆さづりに大地に迫るとしたらどうだろうか。芥川龍之介は、キリストの一生を「天上から地上へ登る為は無惨にも折れた梯子」(『西方の人』)と書いている(傍点筆者)。

(44) 高田淳『易のはなし』(岩波新書、一九八八年)参照。クリトンに脱獄を勧められたソクラテスが、国法との対話という思考実験で見出したのは、脱獄すれば、「君は君という部分に関して国全体を破壊する」ということであった (50b2)。個人とは偶然の一片ではなく、その局所部分に全体の重庄を受ける、受け続ける存在である。そこに自由と責任のかけがえなさがあった。

(45) 旧稿ではデミウルゴスは哲学者である可能性を強く示唆した(九二—九四頁)。根拠の作品化としての哲学については、拙稿「根拠と言葉の途——井上忠の哲学」(『哲学雑誌』第一三一巻第八〇三号、二〇一六年、八—三三頁)参照。

*本稿は、二〇一七年三月一日開催の教父研究会での、大貫隆氏の発表「ヨナス・シンポジウム覚書」に対するコメントを加筆修正したものである。大河のようなグノースと大山脈のようなヨナスに近づくことを可能にくれた大貫氏と、コメントの機会を与えてくれた教父研究会にお礼を言うとともに、身の程を弁えずコメントの範囲と紙数を越えたことをお詫びします。